ヘンリー・ミラー全集

10

# 追憶への追憶

飛田茂雄訳

新潮社版

Remember To Remember
by
Henry Miller
Originally Copyrighted by Agence Hoffman
This book is published in Japan by arrangement
with Agence Hoffman through C. E. Tuttle Co.

**ヘンリー・ミラー全集 (10)**

**追憶への追憶**

飛田茂雄訳

印刷 1968. 1. 25
発行 1968. 1. 30
発行者 [illegible]
発行所 [illegible] 東京都新宿区矢来町71／振替東京808
定価850円
印刷所 [illegible] 式会社
製本所 [illegible] 所
© S. Tobita 1968 Printed in Japan
乱丁・落丁本は本社またはお買い求めの書店でお取り替えいたします
〈第十回配本〉

# 目次

まえがき……五
建設の名人、ヴァルダ……三三
驚くべき不変のボウフォード・ディレイニー……四三
生命の糧……六〇
菩薩画家……七七
ジャスパー・ディーターとヘッジロウ劇場……一二六
殺人鬼を殺せ
第一部　フレッド・ペルレス一等兵への公開状……一四一
第二部　殺人鬼を殺せ……一七四

占星術のフリカッセ料理……二二九
〝猥褻〟と反射の法則……二七〇
忘れずに憶えておこう……二八四
ビュファノー――堅牢な素材の人……三五九
芸術家と大衆……三八三
この世で最も美しく非情なもの……三九九
訳注……四〇一
解説……飛田茂雄……四二九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

# 追憶への追憶

飛田茂雄
訳

# まえがき

この本には、わたしが敬意を表したいと思っている幾人かの人々の肖像が描かれている。その数はいくらでも増やせそうなのだが、そうなるとアルバムを一冊作ることになり、本来の目的からはずれてしまう。六年という時が流れたのだから、かりにわたしがなにもせずじっと坐っているだけでも、非常に多くの人たちと出会うのは避けられぬことだったろう。ここに記されている出会いは、わずかな例外を除けば、みな偶然のものだった。つまり、運命がこの人たちをわたしの目の前にほうり出したというわけだ。

わたしの人生はこうした偶然の出会いを軸にして回転しているかのように思われる。友人関係もほとんどはこうして結ばれた。およそ人間というものは、ぜひ会ってみたいと思う相手でも、念願かなっていざ顔を合せてみるとがっかりさせられるのがふつうである。文通をしていながら、結局会えずじまいという人々もある――たいていはそのほうがいいのだが。わたしはこれまで名士とはあまり会ったことがないが、天才ならばかなりたくさん知っている――大部分は一般大衆にまだ名まえも聞えていない人々であるけれども。神経症や精神病の患者なら知りすぎているくらい知っている。世の厄介者、嫌われ者にいたっては文字どおり際限がなさそうだ。わたしがいちばん好きなのは、小さな人たち、名もない人たちである。

わたしは(一九四二年六月に)ニューヨークを離れたとき、ロサンジェルス、ビヴァリー・グレンのマーガレット(一)およびギルバート・ニーマンから招かれて、同家の長期滞在客になった。ちょうど、経済的に頼れそうな人も手段もすっかり利用しつくしていたころである。ベル・エア別荘地に――言ってみれば、黄金海岸(ゴールデン・コースト)に――隣接したビヴァリー・グレンの山小屋ふうの家は快適そのものだった。ニーマン夫妻がコロラドに行ってしまったあと、ぼくはケノウシャのジョン・ダドリー(二)とふたりでこの小屋に住んだ。ぼくにとってはいろいろな意味でまずい時期で、絵を描きたいという衝動だけがせめてもの救いになっていた。グレンからちょっとハリウッドやヴァインへ出るのでさえ、はるばるアラスカまで旅行するような気分だった。買いものには、ウェストウッド・ヴィレジかビヴァリー・ヒルズまで、それもたいていは歩いて出かけた。自動車をさしあげようという申し出が二度あったが、二度ともおことわりした。ところが、主とし

てダドリーがものぐさだという理由から、遂に一台買うことになった。五十ドルの車である。それは買ってから十日間はもったが、そのあと道ばたの溝にはまったまま、捨てられてしまった。

この時期に関連して、今後いちばん長く記憶にとどまるであろう人物は、ウェストウッド・ヴィレジのアッティリオ・ボウィンケル[18]である。ずいぶん世話にはなったが、そのためではなく、彼という人間が印象に焼きついているのだ。風貌といい、気象といい、ボウィンケルは彼と同年配ごろのわたしの父をしきりに思い出させた。肩肘を張らぬ気楽な態度など、わたしの父そっくりだった。彼は生れながらにして寛大な性格と耐える精神を備えていたのだ。というと、まるで故人のことを語っているようだが、彼はいまも元気旺盛である。わたしはアメリカに帰って以来知りあっただれにもまして、ボウィンケルをなつかしく思う。

ジーン・ヴァルダ[19]にはたいへんな恩恵をこうむっている——わたしが一九四四年以後家族とともに住みつくことになったビッグ・サー[20]の土地を見つけてくれたのだ。実を言うと、わたしはもっとずっと長くここに住んでいるような気がする。おそらく、生れてはじめてアメリカでくつろいだ気分になれたからだろう。ビッグ・サーをはじめて見せてくれたのがヴァルダだとすれば、ここに住むことを可能にしてくれたのはリンダ・サージェント[21]である。だが、リンダのことは、あらためて一冊の本にして、とっくりと語りたい。

ビッグ・サーに着いてから数カ月後に、わたしは母の病気のために東部に呼びもどされた。東部にいるあいだ、わたしはダートマス大学を訪れ、文学の教授である友人ハーバート・ウェスト[22]に会った。わたしは彼といっしょに、ニュー・ハムプシャーとヴァーモントの一部を見てまわったが、その一帯はなかなか魅力的で、心をなごませる土地であった。ハーブ・ウェストは、聞くところによるとやはり仕立て屋の一人息子だということだが、わたしとはまるで兄弟も同然だった。アメリカのみならず、各地でわたしが会ったあらゆる大学教授のなかで、彼は疑いもなく最も人間味にあふれた人物である。ダートマスの学生のあいだで彼の評判が高いという理由も簡単にうなずける。

当時ブリン・モア女子大学の哲学教授であったポール・ヴァイス[23]に会わぬままキャリフォーニアにもどるわけにはいかなかった。彼はもう何カ月ものあいだ手紙で、ぜひ東部にきて、モイラン[24]にあるヘッジロウ劇場のジャスパー・ディーター[25]に会ってみろ、としきりにすすめていた。あまりくどいので、もうディーターは敬遠してやろうかと思ったくらいだが、もしそうしていたらえらい損

をしたことになったろう。

コロラド州のボウルダー市では、菓子屋をやっているギリシャ人のトマス・ジョージに会った。ある晩彼は店の奥にわたしたち数人の者を招き、わたしがアテネを去って以来ついぞ味わったことのないような御馳走をしてくれた。みなが、もうメイン・コースは終りだろうと思ったころ、トマス・ジョージは天火のドアを開け、特別に用意してあった子山羊の丸焼きをとり出した。このときの食事は、わたしがこれまで招ばれたうちで最も豪勢な御馳走として記憶のなかに焼きついている。

そういえば、わたしがニューヨークにいるあいだ、ときどき会っていたもうひとりのギリシャ人のことがすぐ頭に浮んでくる。このギリシャ人は文学関係のお歴々がよく利用する、ある有名なホテルの〝トイレット係〟だった。頼まれれば靴磨きもやっていた。はじめて彼と話をしたのは、彼が、地下室のテラテラに磨きあげられた自分の持ち場で、そこに集まるあらゆる種類の悪臭につつまれながら昼食をとっているときであった。実はぼくもギリシャに行ったことがあるんだ、と言うと、彼はたちまちほうばりかけていたサンドイッチを脇においた。その顔はまるで祝禱でも受けたときのように輝いていた。わたしは近くまで出かけるたびに、地階に降りて彼を訪ねた。ほんのちょっとした立ち話だが、それだけでも、かならず一日じゅう気分が引きたつのだった。鼻をつく悪臭にもかかわらず、このギリシャ人を通して、わたしはギリシャに――ギリシャの明るい空、紺碧の海、そしてまた、深い精神的な豊かさに――触れることができた。数多くの有名人がそのトイレットに足を運ぶ。だが、光の国からのこの使者に注意を向ける者がはたしてひとりでもいるだろうか？

興味深い人物はいつも、目だたぬところ、まさかと思われるところで見つかる。いつだったか、わたしにアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドを訪ねてみるようすすめた大学教授がいた。わたしはそのすすめに従わなかったために、たいへんな機会を逃がしてしまったのかもしれない。しかしわたしは、ホワイトヘッドに会ったところで、ハリウッドでよくお喋りをしたある肌の黒い男ほどもぼくの興味を惹くことはなかったろうと確信している。その男というのは、ある大通りに面した理髪店に雇われている靴磨きにすぎなかった。わたしが彼にはじめて会ったのは、ある晩、その理髪店が閉まったあとのことだった。彼はウィンドウぎわの歩道にタイプライターを持ち出し、その前に坐っていた。人目にさらされたこんなところで、彼は自作の小説の大部分を生み出したのである。しばらくことばを交したあとで、彼は作品を見せたいからぜひまた翌日きてくれと誘った。わたしは数

冊分の分厚いタイプ原稿に目を通した。いずれもずっしりと中身のある長篇小説だった。用いられている言語は明らかに女王さまの英語ではなかった。〝アフリカ英語〟とでも呼ぶのがいちばん適切かもしれない。とにかくそれは、わたしがそれまでに見たどんなものにも似ていなかった。といって不可解であったわけではない。まったくその逆だ。オールダス・ハクスリーやイヴリン・ウォーのいかにも小説くさい散文とくらべると、それは豊かな、高揚された言語だった。それを読みながらうたた寝できる者などひとりもおるまい。なにしろ筋立てからしてセンセーショナルだった。小説というよりはフレスコ壁画だ。わたしはこれらの作品を出すだけの勇気のある出版社はないかといろいろ考えてみたが、ひとつも思い浮ばなかった。ここにこそアメリカ文学のなかでも比類のないもの――誠実な黒人のやりかたで作られた黒人の本――つまり、へたと言えばお話にならぬほどへたかもしれぬが、店頭に氾濫している安っぽい小説より千倍も興味をそそる作品があったのだ。へたというのは、文芸批評家の歪んだ審美眼で見た場合にかぎってのことである。この意味ではへたくそのかぎりをつくしているが、別のある一面から見ればかえって新鮮であり、刺戟的であり、非凡であった。ハリウッドは絶えず新しいタレントを探し求めている（と思われている）ところである。だが連中はいつも望遠鏡で遠くを探しているのだ。この男はくる日もくる日も彼らのすぐ足もとにいて、彼らの靴を磨き、服にブラシをかけている――しかもこの逸材に気づく者はたったひとりもいない。

あてもなくほっつき歩いていると、いろいろと変った、珍しい、そしてしばしば孤独な人物に出会うものだ。まだ戦時中とあって、たまには陸軍や海軍の軍人と知りあうこともあった。たいていは脱走兵、ないしは脱走のことを考えている男たちだった。戦争の正しさを信じ、前線におもむくことが自分にとって必要な、そして当然なことだと信じている軍人にはひとりもお目にかかったことはない。考えてみるといささか驚くべき事実だが、本気になって戦争をする気になっている者など全然いなかった。たいていは――山奥や、大平原や、村落出身の――素朴な若者たちだった。幾人かは妻子との別離に耐えきれずに脱走したという。家畜のことが心配で逃げた者もおり、ただもう自分の育った土地への郷愁やみがたく逃げてきた者もいた。みんな地の塩とも言うべき、善良な、正直な男たちだった。そういった連中のうち何人が、無智で意地の悪い衛兵によって射ち殺されたり、営倉にぶちこまれたり、拷問にかけられたりしたのだろうかと、いつも気にしないではいられなかった。

ミシシッピ州に行ったとき、わたしはある酒場で書籍



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

の外交販売をやっている男に出くわした――『大英百科辞典』のセールズマンだった。まるで自分の幽霊に出会ったような気がした。この男は一日の卑屈な仕事を終えたあと酔っぱらって、わたしが自分の苦い経験からいやおうなしに覚えてしまったあらゆることをわたしに話して聞かせ、歩合としてどれほどの大金が自分のふところにころがりこむかを、やけっぱちな調子で吹聴するのだった。こいつはなぜおれに百科辞典を売りつけようとしないんだろう、とわたしは不思議に思った。もうすっかり酒に呑まれて、それどころではなかったのかもしれない。この男がよろよろとわたしのそばから離れて街角を曲ろうとするとき、そのあとをつけはじめた柄の大きな若い黒人の姿がチラッと目の端にうつった。アメリカはほんとうにもうひとりあの書籍セールズマンを必要としているのだろうか――また、あの黒人はああやって得られる金を余分に必要としているのだろうか？　そう思案しているうちにふと思い出したのは、南部のどこやらで会ったあるアメリカの作家のことだ。ある晩のことだが、この作家は来客をもてなすつもりで、ボクサーの友人といっしょに演じた酒の上での武勇伝を語っていた。どうやら彼らはただなぐさみのために暗い道を歩き、なんの理由もなく、また一言のあいさつもなく、いきなり黒人の前に立ちふさがっては、殴って気絶させていたらしいのである。彼に言わせれば、でかくていきのいい黒ん坊をパンチ一発でぶっ倒すのがミソだ。（黒人は特別に頑丈な頭蓋骨を持っていると考えられている。）それでうまくいかなきゃ、下っ腹を蹴とばすか、酒壜で脳天をぶち割るんだな……。大したおはなしである。アメリカの作家が時にはどれほど退屈と抑えきれぬものか、お察しもつこうというものだ。

さて、ウィリー・ファングとなると話はまるで変ってくる。ウィリー・ファングはロサンジェルスで酒場を経営している。かたわら、ときどき映画に出演している。店に入ってすぐ、ああの男か、と思ったのもそのせいだ。ウィリー・ファングは音楽が、それも種類を問わずあらゆる音楽が好きである。店には三人の楽師をいれている。みんなオクラホマの流れ者だ。どうやら彼はお客さんのためというよりは、自分の楽しみのためにこの三人を雇ったのではないかと思われるふしがある。ピアニストのうしろに椅子を近づけ、腕組みをし、敬虔な仏教徒のように法悦に満ちた表情をして坐っているのが彼の癖だ。ときどき彼はわれわれも聞き入っているだろうかと、ふりかえって見た。ほほ笑むと顔じゅうが明るく輝き、まるでワイキキの浜辺に傾く太陽のようだった。それは、「音楽とてもいい、とてもいい」と言っているような微笑だった。一曲終ると、ウィリー・ファングは立ち

あがり、心をこめて愛想よく、お飲みものはなににいたしましょう、とたずねた。彼はわれわれ客を楽しませたかったのだ。酒を買うのは、われわれであろうと彼であろうと、どっちでもいいというふうだった。要するに飲んで音楽に耳を傾けさえすればいい。時おり楽師たちもわれわれの仲間入りをして飲んだ。三人とも純朴な連中で、できるだけのことを一生懸命にやっていた。ウィリー・ファングのために演奏する楽師として、この三人こそ完全に適任だと思われた。三人とも彼の酒場の雰囲気にすっかりとけこんでいた。

わたしはたちまちウィリー・ファングが好きになってしまった。夜がふけるとともにますます好感は増す一方だった。彼はきれぎれのことばしか話さなかったが、いつもこぼれるほど愛想のいい微笑をたたえてものを言った。わたしは映画で彼が演じた役のあれこれをあざやかに思い出したが、そのどれもウィリー・ファングの本領を生かしているとは言えなかった。わたしは何度かそのことを彼に告げようかと思ったが、わかってもらえる自信はなかった。そこで、わたしはただひと晩じゅうウィリー・ファングに微笑を投げかけ、音楽に拍手を送り、心のなかで言いつづけていた、「音楽とてもいい、とてもいい。ウィリー・ファングもとてもいい、とてもいい」彼には気持ちが通じたのではないかと思う。

酒場のことが出たついでに……わたしはある日の午後、かねがね見たいと熱望していたモンロー堡(とりで)[一三]を訪れた。オールド・ポイント・カムフォートを――そしてあの壮大なチェムバレン・ホテルの崩れ残りともいうべきホテル[一四]をひと目見ないではいられなかったのだ。わたしはもう何年ものあいだ、そこで休暇をすごすことを夢みていた。それからわたしは、一生の大半をこのホテルから堡へ通うことに費やしたひとりのコルネット吹きと知りあったこともある――彼が自殺を遂げるほんの一週間前のことだった。それはとにかく、オールド・ポイント・カムフォートを訪れた日の午後おそく、わたしはフィーバス[一五]のとある酒場に入っていた。エイブ・ラトナー[一六]もいっしょだった。ふたりとも、その酒場が絵でいっぱいであることに気づかぬわけにはいかなかった。そのうちいくつかは悪くなかった、どうして、悪くないどころではなかった。描いたのは酒場の経営者だということがすぐわかった。その経営者の話を聞いているうちに、はたしてこの男はすぐれた画家の作品を見たことがあるのだろうかと疑問が湧いてきた。だいいち、この狭いフィーバスの町の外へ一歩でも出たことがあるのかどうかさえ疑わしい。(太陽神フィーバスの軍馬が泉で水を飲むのを見たことすらないのだ。[一七])彼はもうずっとむかしに絵筆を捨てたということで、いまはもう日曜画家ですらなかった。世の

なかにはいつまでも絵を描きつづけ、それを一生の仕事にする人だってあるのに、彼の頭にはそんな考えはちっとも思い浮ばなかったのだろう。絵なんてどうせ暇つぶしにすぎないと最初からきめてかかっていたらしいのだ。そういえば、アメリカじゅうには、彼のように才能はありながら自分が芸術家であることにまったく気づいていない人間が、何千何万人いることだろうか？　失敗者たちである。周囲に彼らの才能を養い育てるなにものもないがための失敗者たち。虚空のなかで、なにも聞かず、なにも見ず、なにも知らずに……存在しているがための失敗者たち。だからどうだというのか？　どうということもない。ただそれだけの話だ。

人もさまざまなら、ところもさまざまだ。きみは一日じゅう車を走らせ、夕闇の迫るころ、まったく見ず知らずのところで不意に思いついて道ばたの宿屋とか、バーとか、カフェに入った経験を持っているだろうか？　そういう地の果てといったところの、もの淋しい空虚な感じを憶えているだろうか？　バーのいちばん奥にぽつねんと腰掛けている男がブツブツひとりごとを言っているかもしれない。蜘蛛の巣につつまれた片隅では、若さを失ってしおたれた商売女がおいおい泣いている、あるいは歯ぎしりしている。そんなことはどっちでも同じだろう。たちまちジューク・ボックスが鳴りだすだろう。家を出たときから行くさきざきどこへでもついてまわった、あの同じ歌のくりかえしだ。なんとも憂鬱そうな震え声！　一日の終りに心をひきたてるのにはもってこいの歌だ。おれも酔っぱらえたらなあ、と思うが、酔えない。出された酒をグイッとあおって咽喉に押しこむ。河岸をかえても、まったく同じわびしさ、まったく同じ憂鬱さ、ジューク・ボックスまで同じものうげな泣きごとを並べる。これでは諦めるほかはない。そこで、あてずっぽうにホテルを、それもなるべく安そうなのを見つけて入ってみると、いつの間にか十字軍時代のイギリスにたちかえったような気分になる。顔を洗って食堂をさがす。メニューはまるで消化不良の宣伝文みたいだ。やがて床に入って本を読もうとする。ドンと一発、自分の頭に風穴をあける……つまり明りを消す……そしてひと晩じゅう眠れぬままにアメリカの風景を再現してみる。

場所……そう、たとえばロサンジェルスのメイン・ストリートだ。薄気味の悪い、歪んだ、破滅寸前の、信じられぬほどひどいあらゆるものにもかかわらず、いつでもこのロスが引き合いに出される。わたしなりの考えからすれば、ロサンジェルスのメイン・ストリートはアメリカでも最悪と言っていいくらいの通りだ。醜悪さが叫び声をあげている通りだ。この通りを歩いてバーに腰掛けている人たちの姿をひと目見るだけで、背筋がゾッと

する。類人猿の世界だ。ハイヒールをはき、とまり木みたいな腰掛けから腰掛けへとよろめき渡る類人猿の世界だ。そこに雰囲気があるのだと思っている外国人を、わたしも知っている。これこそ偽りない、ナマのままのアメリカだと彼らは思っている。安ピカもの。なにもかも安ピカものだ。それを彼ら外国人は喜ぶのだ。風変りでおもしろいというので。そのうちだれか質の悪いやつが——なんの理由もなく——彼らを殴りつける。いや理由は、相手の面構えが気にくわぬということかもしれない。それがアメリカなのだ。それを見つけるために映画を見に行く必要なんかない。ただメイン・ストリートを歩いてみればいい——どこのメイン・ストリートだってかまわない。

アメリカにはありとあらゆる場所がある。空虚な場所が。そしてこれらすべての空虚な場所は満員である。空虚な魂の持ち主たちが押しあいへしあいしている。みんなてんでんばらばらで、みんな気晴らしを求めている。まるで人生の主要な目的は忘れることにありというように。だれもかれもが、彼らに迫いすがる人生の諸問題を忘れて、仲間の人間といっしょになれるような、気分のいい小ぢんまりした酒場を探し求めている。そんな店が見つかるわけはないのだが、いやかならずあるはずだ、ここになければどこか別のところにあるはずだと信じている様子である。彼らはそれぞれ、まるで偏執狂者のように自分の心に言い聞かしている——「ここはいいぞ。感じのいい店だ。ここでなら楽しめる。さあ、おれは淋しいだの、みじめだの、そんなことは忘れるんだ」そう言いながら、彼らはほんとうに淋しくなり、ほんとうにみじめな気分になる。そのうち、だれかが自分に話しかけているのに気づく。実は酔いどれがひとりごとを言ってる最中なのだ。その酔いどれは孤独でみじめなだけでなく、頭がいかれている。とうとうこっちもやけっぱちになり、うちへ帰ろうと決心する。こうするにはよほどほんもののやけを起さなくてはならない。なぜなら自分の家は、やけになったとき足を向けるこの世で最後の場所なのだから。もちろんわが家にはあらゆる最新式の設備その他がそろっている——ラジオ、電気冷蔵庫、電気洗濯機、真空掃除器、大英百科辞典、漫画新聞、電話、スチーム、電気グリル、シャワー・バス等々。いわば、生活上のあらゆる安楽が。ところが、家庭におけるアメリカ人の住み心地の悪さときたら、どこの国にもまったく例がないほどである。そうひどく目だたぬ、不活発な狂気がアメリカの家庭の雰囲気を満たしている。安楽椅子に坐って、ちょっとつまみを廻しさえすれば、電波に乗ってあの甘ったるい、特別に選ばれた声が聞こえてくる——「世界ハアメリカニ期待ノ眼ヲ向ケテオリマス！」

もし世界がアメリカの心の奥底をのぞき、家庭の中心が実はどんなであるかを見抜くことができさえしたら！そうしたらたぶん世界はその顔をそむけるだろう。そしてアメリカに対する期待と信頼とを捨ててしまったほうが、世界にとって千倍もいいことなのかもしれない。これはひとつの思いつきにすぎないが。

もちろんホーム、スイート・ホーム以外にも場所はある。上品で清潔な場所が――たとえば教会みたいに。教会の――むろんプロテスタントの教会だが――内部ほど上品で清潔な場所がまたとあろうか？　あるとすれば病院か死体公示所くらいのものだろう。教会の外側は、気むずかしげな色のとり合わせや、雲の峰をつき進む羊の群だの、われらの救い主であるあのイエスが十字架に釘づけされるところだのを図柄にした陰気なステンド・グラスなどのせいで、いつも少しばかり狂った感じを与える。だが、なかを見ると、思わず誘いこまれそうだ。幾列も並んだ座席、そして各座席の背中のポケットに隠されている詩篇入りの祈禱書。説教壇にはかならず、神の人と呼ばれる、あの善良で、清らかで、高潔な人が立っている。彼の声がかすれたり、咽喉がかわいたりしたときの用意に、水差しが前においてある。この親しみ深く善良な牧者は、教会につどう信徒の群をどんなに愛していることか！　彼は主イエスを愛するのとまったく同じように全教会員のひとりびとりを愛している。実にりっぱな人だ。ただ、年がら年じゅう屁みたいなたわごとを喋るのさえやめてくれれば。ほんとうの神のメッセージを伝えてくれさえしたら！

やはり教会はほんとうに充実した場所ではない。ボーリング場も、映画館も、玉突き場も、ドラッグ・ストアも、士官学校も、寄宿学校も、刑務所も、聾唖学校も、精神病院も、みなちがう。それぞれが他の場所より一層空虚で、喜びがなく、悪の匂いがする。ムース[一九]やエルクス[二〇]に属することさえ助けにはならない。要するに行くべきところなどないのだと悟るためには、共産主義者になってみることが必要なのかもしれない。だが、つい先だってグレネレン[二一]にあるジャック・ロンドン[二二]の旧宅を訪れたときに、わたしは内心こう思った――「アメリカで見たもののうちで、楽園[パラダイス]にいちばん近いものがここにある」と。しかし、ジャック・ロンドンはそこにあまり住まなかったという案内者の説明だった。彼はあまりにもおちつきを失っていた。そして自分のために楽園[パラダイス]を作っておきながら、そこから自分を締め出してしまったのだ。

プーシキンは『死せる魂[二三]』を読んだとき、苦い顔をして笑いだしたあと、「このロシヤはなんと情[なさけ]ないところだろう！」と慨嘆の声をあげたと言われる。これこそ、わたしが絶えず心のなかでアメリカについて言っている

ことだ。「なんと情ないところだ！　なんというできそこないだ！」フランス人は、このところアメリカ文学流行のおかげで、ようやくこういう事実を知りはじめている。彼らフランス人は、アメリカの作家たちが祖国アメリカに関して外国のだれよりもひどいことを言っているのを知って、驚いているかのようである。アメリカを論じた例のデュアメル[三三]の本（『未来生活風景』）など、フォークナー、スタインベック、コールドウェル、ドス・パソス等々といった作家の批評的観察記にくらべれば、もはや生ぬるいことを彼らは認めている。彼らはわが国の作家たちがますます現実に目ざめつつあることを祝福しているのだ。

デュアメルがフランスの同胞たちにその危険性を警告しようと試みた「未来生活」は、もちろん今日すでにソヴィエト・ロシヤで営まれている。それはもう疑問の余地なく不可避の生活だと思われているらしい。ロシヤ人はもはや〝新世界〟のなかに足を突っこんでしまっているのだ。このアメリカに住むわれわれは、同時に二つの世界に生きることが可能であると考えたがる。共産主義的な立場からすれば、わが国の最も有能な作家たちは保守反動ということになる。彼らはなにかの終末を代表している。こうした社会諷刺家どもは、あまりにも大袈裟な厭世主義や幻滅感を抱きすぎる。元気旺盛な新興国民は信念に満ち、勇気に満ち、楽天主義に満ちている。

もちろん、わが国の最も有能な作家といえども、国民全般に対する影響はほとんど問題にならぬことを忘れてはなるまい。国民大衆は、どんな事態が生じようとも、相変らず共和党と民主党の候補者に投票するだろう。一方ソ連は充分な意識をもって前進しつつある、非常な勢いで突き進んでいる。われわれアメリカ人は半ば昏睡状態で、酔っぱらいのようにふらふらしている。われわれに戦争の勝利を得させてくれた人々は、大学教授、技術家、産業家、発明家――ほとんどが保守的な思想の持ち主である。彼らは新しい世界など欲してはいなかった。ただ古きよき時代にもどりたかっただけである。ロシヤ人は新世界を求めており、その実現のためにはどんな手段にも訴えるであろう。そして、われわれがそれを望もうが望むまいが、その新世界はすでに形成されつつあるのだ。ただそれは、これまでのところ、だれもがあまり好きになれぬ世界である。ロシヤ人ですらあまり住み心地はよくないらしい。たしかに新しい秩序を信じている人々はみな、いま発明発見されているあらゆるものの成果を、究極的には一般庶民が受けつぐことになると期待している。だが、そのためにだれの屍を乗り越えることになるのか、とわたしは聞きたい。要するにどうしたらこの奇蹟が実現するのかについては、だれひとり納得の



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo